



# 烏梅

2022年冬 Vol.41

広報誌「うめ」

叶匠壽庵

琵琶湖と人のものがたり《その2》

## ”ぼてじゃこ”の湖 琵琶湖 知られざる水中百花

かわせせいご

川瀬成吾

滋賀県立琵琶湖博物館主任学芸員

湖岸に咲き誇る淡いピンクのソメイヨシノ、新緑と深緑のコントラストが美しい初夏の山々、湖面に映る色とりどりの花火、緑地に赤や黄色のパッチが入る秋の紅葉、青い空に純白の衣をまとった比良山系。琵琶湖周辺は四季折々に様々な色で私たちを魅了させてくれる。

当たり前前に感じる色のある世界だが、哺乳類の中で色鮮やかな世界を見ているのは実は私たちヒトを含めた霊長類だけである。その理由は、哺乳類の歴史にある。地球上を恐竜が支配していた時代、哺乳類の祖先は恐竜の



寿長生の郷にあるイチモンジタナゴ池、通称ぼてじゃこ池。市民団体ぼてじゃこトラストと共に保全活動を行っている。

寝静まった夜にしか活動できない小さな存在だった。極めて長い夜行性生活の中で脊椎動物に広くみられる4色型色覚「赤、緑、青、紫」のうち、緑や青に関する色覚が欠損し、色のある世界を失ってしまったのだ。どうりで、カラフルな鳥はいるのに、色とりどりの哺乳類はいないわけである。

恐竜が絶滅した後、哺乳類が爆発的に進化し、その中に霊長類がいた。霊長類は樹上という新しい生活の場を見つけ、木の実を餌とするようになった。樹上で木の实



滋賀のぼてじゃこ。上段左からイチモンジタナゴ、シロヒレタビラ、中段、カネヒラ、イタセンバラ、ヤリタナゴ、下段、アブラボテ、ニッポンバラタナゴ

らびれ)の先が真っ白に彩られるシロヒレタビラ、大きな体と鰭に濃青緑色とピンクを纏うカネヒラ、紫に染まり高貴な雰囲気漂わせるイタセンバラ、鰭が朱色に染まるヤリタナゴ、艶やかな褐色肌のアブラボテ、落ち着きがありながら鮮やかな薔薇色となるニッポンバラタナゴ：ぼてじゃこたちはそれぞれ個性が際立ち、さながら水中に咲く花のようだ。

タナゴの仲間は、卵を産むために生きた二枚貝を必要とする。かつて琵琶湖やその周辺には、二枚貝が豊富にあった。そのため、沿岸にはヤリタナゴとシロヒレタビラ、内湾や内湖にはイチモンジタナゴやニッポンバラタナゴ、扇状地にはアブラボテといった具合に、いたるところにタナゴが溢れていたことが過去の研究や標本調査によってわかっている。まさに琵琶湖はぼてじゃこの樂園で、春や秋になると水中で様々な色の乱舞が繰り広げられていたのである。ぼてじゃこはどこにでもいる魚という意味で呼ばれ、半分バカにされながらも半分愛されていた名前なのだ。

しかし、私たちにとって水の中のことは実感として理解しづらく目を向ける人が少ないため、気づいた時に

を食べるためには、葉っぱの中から赤い実を見分けられた方が生存に有利である。そのため、進化の時間の中で新たに緑を認識できる色覚を獲得して3色型色覚となり、様々な色を認識できるようになった。そのおかげで、霊長類の末席にいる私たちヒトは色を使って文化や芸術、そして心を発達させることができたのだ。

色は私たちにとってなくてはならないものだが、それは自然界でも同じことである。多様な色が自然界に存在するということは、それだけ様々な生物の生き様がそこにある証であり、生物多様性の豊かさの象徴でもある。

私たちにとって、見えづらい水の中は馴染みのない世界だが、湖の中にも実は四季折々に美しい色の変化がある。琵琶湖は日本で最も純淡水魚が豊かな水辺として知られ、その中にひと際目を引く色鮮やかな魚たちがいる。滋賀県では「ぼてじゃこ」と呼ばれるタナゴの仲間だ。

タナゴの仲間は日本に16種、琵琶湖には7種が分布する。琵琶湖のタナゴの種数は日本でも屈指りである。オスは繁殖期になると美しい婚姻色を呈し、種類によって様々な彩どりを示す。白桃色と水色の一文字が走るイチモンジタナゴ、深い青緑の体に臀鰭(しりびれ)と腹鰭(は

は生態系が大きく変わっているということが多々ある。ニッポンバラタナゴ、イタセンバラは琵琶湖から絶滅、イチモンジタナゴは絶滅寸前、カネヒラを除くその他のぼてじゃこもほとんど見かけなくなり絶滅危惧種となっている。それは、たったこの数十年間での出来事である。私たち人間活動の結果、琵琶湖の中は春を迎えても色気のない殺風景な世界になってしまったのだ。

私たちは四季折々に移ろう色鮮やかな世界から恩恵を受けて生きている。それは陸上だけでなく水の中も同じである。失った琵琶湖の水中美を再び見られる日は来るのだろうか。苦勞するかもしれないが、適切に手をかけてやれば、自然は必ずそれに応えてくれる。目に見えづらいものにまで気を配れてこそ、私たちの未来も色鮮やかに彩られるのではないだろうか。

今一度近くの水の中を見つめてみよう。そこに色はあるだろうか。

川瀬成吾

専門は水族保全志学・系統分類学。滋賀県出身。幼少の頃より失われる琵琶湖の自然を何とかしたいと思い、琵琶湖博物館の学芸員になる。